

ラテン語とフランス語

古典作品を素材に【13】

キケロ『友情論』より — 形容詞vetus(「古い」)をめぐる —

秋山 学

こんにちは。ちょうど1年前にこの新しいコラムがスタートしました。幸い読者の方々からご好評をいただけたようで、2年目に入ります。基本的に、昨年度と同じパターンで書き進めてゆきたいと考えています。今回はテキストとして、再びキケロ『友情論』を題材に取り上げることにしましょう。

原文 Exsistit autem hōc locō quaedam quaestiō subdifficilis : num quandō amīcī novī, dignī amīcitiā, veteribus sint antepōnendī, ut equīs vetulīs tenerōs antepōnere solēmus. Indigna homine dubitātiō! Nōn enim dēbent esse amīcitiārum, sicut aliārum rērum, satiētātēs : veterrima quaeque, ut ea vīna, quae vetustātem ferunt, esse dēbent suāvissima vērūmque illud est, quod dīcitur, multōs modiōs salis simul edendōs esse, ut amicitiae mūnus explētum sit. — *De amicitia*, XIX 67.

仏訳 Or c'est ici que se présente une question assez difficile : faut-il parfois accorder à de nouveaux amis, s'ils méritent notre amitié, la préférence sur les anciens, comme nous faisons pour les vieux chevaux, auxquels nous préférons les jeunes d'habitude. Doute indigne d'un homme ! Quand il s'agit d'amitié, il ne doit pas être question, comme cela arrive ailleurs, de satiété : la plus ancienne doit toujours, comme les vins qui supportent le vieillissement, avoir le plus de charme, et il est vrai le proverbe qui dit qu'il faut manger ensemble bien des boisseaux de sel pur remplir jusqu'au bout son rôle en amitié.

訳 けれどもここに、ある意味でけっこう難しい問題が立ちはだかる。それはすなわち、友情に適う新たな友人が現れたなら、ちょうどわれわれが、年老いた馬に替えて若馬を選び取るのを常とするように、果たしてその新たな友人を、旧友に替えて選択すべきなのかどうか、という問題だ。何とも人間には相応しくない問いではないか！ というのも友情には、他の事柄と同じような意味での飽満はあり得ないからだ。何であつても、ちょうど年代物のワインと同じように、古くなればなるほど甘美になるのが必然だ。そして「友情の務めを果たすためには、塩を何モディウスも一緒に食べなければならない」という諺は真実だからだ。

末尾に引用されている諺は、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』(1156b27)や『エウデモス倫理学』(1238a2)でも、同じ文脈で前提とされているものです。「モディウス」というのは体積の単位で、約9リットルに当たります。『エウデモス倫理学』の当該箇所では「1メディムノス」となっていて、これは6モディウスに相当するため、「何モディウスも」というのは約54リットルということになるのでしょうか!?

今回は、左に引いた一節でキーワードとなっている vetus (「古い」; フランス語では vieux) という単語について考えてみましょう。ちなみにイタリア語で「古い」を表す語彙は vecchio ですが、この語形は vetus に縮小辞 -ulus を伴った vetulus の後期ラテン語における語形 veclus に起源を有します (vetulus は左の一節にも複数与格形 vetulis のかたちで現れますね)。

この vetus という形容詞は「原級」に当たり、比較級は (まれな形ですが) veterior、最上級は veterimus となります。上の一節に出る suāvissima という形も最上級 (中性複数主格) の語形です (原級は suāvis)。形容詞は名詞を修飾する品詞ですから、男性・女性・中性名詞のいずれをも修飾しうるように、これら三性各々のための語形を備えています。また変化パターンとしては、名詞を中心とする「名詞類」に属するので、これら3つの性にわたる語形変化のほかに、数 (単・複)、および格 (主・属・与・対・奪・呼) による語形変化を伴います。ただし vetus の場合、辞書の見出しに挙がる単数主格および単数属格の語形は、どちらも三性に関して同一です。単数属格は veteris という語形になりますが、ここに現れる語幹 (veter-) は、続く与格以下の変化形の基幹部となるほか、近代語に派生語を多数提供しています。「ヴェテラン」(「古参」という語彙に、語幹部末尾の r 音が含まれていますね (< veterānus)。また上に記した比較級・最上級にも r 音が現れています。したがってラテン語学習の際、「名詞類」に関しては、単数主格と単数属格の語形を併せて記憶することが必要です。属格形は、このように語幹部分を含み、派生語への視座を得る上でも必須である一方、辞書を引くために主格形は欠かせません。また比較級は -ior (男・女性)、-ius (中性) という語尾を持ちますが、-ior という語尾は「メジャー・リーグ」(māior = māior) など、ラテン語比較級の語尾を留める近代語語彙のうちに辿ることができます (「マイナー」minor は不規則)。

なおギリシア語で vetus と同じ語源に遡る語彙としては、ἔτος (etos:「年」) があります。この語の語頭には、F 字で表され w【ウ】音を伴う「ディガンマ」が隠れており、vetus との関連性が明らかです (2014年8月号を参照)。またサンスクリットの同語源語としては vatsa (「年」「子孫」) などが挙げられます。

(あきやま・まなぶ)